

南へ追われて、南でふれあいを求めて

——林芙美子の南洋小説をめぐって

張 雅

はじめに

近代日本の歴史において、文学者を戦地に派遣する大規模な戦争動員としては、一九三八年九月中旬に中国大陆に送り込まれた「ペン部隊」二十二名と、一九四一年十二月から南洋に旅立った七十名以上の「徴用作家」が挙げられる。林芙美子はそのどちらにも参加し積極的に戦地に入り、男性作家に伍して占領地の情報を国民に発信した。「ペン部隊」の時期には、女性の報道記者として漢口に一番乗りし、前線で蠟燭を灯しながら兵士の勇戦奮闘を記録し続けた。

彼女は三ヶ月の中国大陆での経験を『戦線』（朝日新聞社、一九三

八）と従軍日記『北岸部隊』（中央公論社、一九三九）に結実させた。日本社会で大きな反響を呼んだ漢口の従軍記であったが、一九四二年十月末から一九四三年五月までマレーに滞在した際の林芙美子は明らかに消極的で、長編の視察日記は発表せずに、異文化体験を中心とする無欲恬淡とした牧歌的なものばかり発表していた。^①しかし戦後、日本国内の出版状況が一新した後に「ボルネオダイヤ」（『改造』一九四六）、「荒野の虹」（『改造文芸』一九四八）、「浮雲」（『風雪』一九四九年十一月—一九五〇年八月）、「文学界」一九五〇年九月—一九五一年四月）などの南洋小説を発表し、占領地で戦争によって変質させられ、異性との肉体関係を求めることによって戦争の恐怖から逃避しようとした日本人像を描き続けた。

林芙美子の南洋体験に関する先行研究はいくつかの方向から論じられている。一つ目は彼女の南洋での足取りを検証して、仏印訪問の真偽を検討するものである。加藤麻子と望月雅彦は、林芙美子が仏印行を実際に実行したことに否定的な見方を示した。他方、中川成美は帰国直前に仏印に滞在した可能性があると推測している。また、山下聖美は戦時中に林芙美子が訪れた地域を調査して膨大な資料を発見し、彼女が南洋で行った文化交流などの全体像を浮かび上がらせた。二つ目は、戦後の作品に描かれた主人公の造形と作者個人の体験とを関連させて、戦争に協力した林芙美子の戦後の立場を論証するものである。高山京子の論は、「浮雲」のゆき子と富岡は林芙美子の分身であり、作品の性質を「芙美子の遺書であると同時に贖罪の書でもあった」として、作家の個人的な体験が主人公の造形と重なっていることを指摘している。島本圭太は、「浮雲」の主人公が戦後になっても仏印の生活の甘い香りから抜け出せなかったことを分析し、作者にとつての創作活動は「イデオロギーの欺瞞から身を引き剥がしていく痛みを伴う作業」であると考察した。三つ目は、占領から敗戦まで価値観の逆転する状況下で、戦後の日本社会とかつての占領地南洋との狭間に生きる人間の狂気と虚無を、個人と集団の関係性から考察するものである。たとえば、間中宏美は、「浮雲」の登場人物ゆき子がタイピストとして仏印に赴いたにも関わらず、戦中には戦場で性的対象として扱われ、戦後にはアメリカ人

ジョオのオンリーになるという、二度のアイデンティティ喪失を経たことを論じている。川本三郎と羽矢みずきは、「浮雲」の富岡とゆき子がいかに逆転した日本の環境で生き延びる道を模索しているのかを検討した。山下聖美は「林芙美子『ボルネオダイヤ』を読む」で、主人公の球江が卵を食べながら、自殺した同室の澄子の表情を思い浮かべるシーンより、政治という外部の圧力から「自分自身の『内』なところ」へ帰ることを希求したと解釈している。そして、四つ目は、林芙美子の文学作品で表象された南洋という空間の特徴と、南洋という舞台がそこで生きる日本人にとつてどのような役割を果たしているのかを検討するものである。例えば尹小娟は、南洋をめぐる作品群に共通する「人間と自然との戯れに満ちた楽園」と、「虚無感と閉塞感が漂っている」南洋の、二面的なイメージを提示している。

戦時中の林芙美子は、当局が起こした戦争に率先して相乗りして、侵略正当化の旗を振り、日本国家拡大の伴奏をする作品を上梓した一方で、戦後には、それとは正反対の方向性から軍部の醜悪な一面を暴露し、軍事侵略に伴い占領地に赴いた個々人の人生が頓挫してしまつた物語を頻繁に描いている。戦後、彼女が書いた南洋をめぐる作品には三つの主題が見られる。一つ目は、敗戦した日本社会における過去の南洋統治に対する批判を、文学的創作の中で再認識し、再構築することである。二つ目は、前線と銃後、外地と内地の関係

性も組み込みつつ、占領地に赴いた個々人にとって南洋の体験もたらした意味合いを、戦中と戦後の連続線上で更新し続けることである。三つ目は、戦場で個人の生の意味が極限にまで圧縮されていた中での、占領地で性的存在と見做される女性と支配的地位の男性との間の性的接触を描写することである。

以上のような南洋作品の特徴に対し、先行研究にはいくつかの視点の欠落、あるいは限界が見られる。その一つとしては、林芙美子の中国大陸での従軍と南洋徴用の体験との相違が十分に検討されていなかった点である。南洋徴用の体験は林芙美子の従軍体験の延長線上の終点としてあるが、『北岸部隊』で戦争に飽きたことを漏らした彼女は、「平和」な南洋に渡った後に何を見ていたのか、中国大陸の戦場では自分の感傷と悲哀を日本人だけに向けた林芙美子が南洋の住民にはどのような印象を持ったのか、それぞれ考察する余地があるだろう。もう一つは、戦後の南洋小説で、日本の占領地統治がいかに語り直されているのかという点が深く掘り下げられていないことである。作家の戦争責任を検討する際には、戦前と戦後における、日本統治に対する認識の差異を確認する必要がある。最後に、林芙美子の戦後の南洋小説では占領地での兵士と南洋に渡った女性との性的接触を取り上げているが、この体験が戦後日本社会で出口を見つけれない人間の生き方にどのような意味合いを持つことになるのか、その議論がなされてこなかったことが挙げられる。

本論文では林芙美子の小説を総合的に取り上げ、彼女の中国・漢口での従軍と南洋での徴用体験とを繋げた上で、南洋での記憶がいかに戦後に継承されるかを検討する。そして、戦後の小説に描かれた、日本に復員した兵士や南洋に逃亡する女性の表象の分析を通して、戦後日本に引き揚げてきた主人公たちが感じた虚脱感と無力感が、いかに過去の占領地での体験と結合しているかを解明する。

1 林芙美子の南洋体験

仏印を訪れた時に「国賓」のような待遇を受けた吉屋信子や森三千代などと比べると、マレー方面に臨時徴用された林芙美子、佐多稲子、水木洋子、小山いと子、美川きよなどは病院船に乗せられるといった国際法に違反した扱いでシンガポールへ行つた。船の中では、便所に行く時も白衣を引つ掛けなければならないといった様子であつた。同行した黒田秀俊の『軍政』によると、シンガポール到着の直後に、徴用作家が憲兵中尉に病院船に便乗したことを漏らしたところ、「生命の保障もいたしかねる」と警告されたという。シンガポールでは「女流作家の人たちは、別棟の兵舎の三階に、慰問団の女や、各地に散つてゆく慰安所行きの方たちといつしよに泊つていた」¹⁶という状況だつた。林芙美子の場合は、往路と初日の宿泊で窮屈な思いはしたが、その後は朝日新聞社支局の手配で快適な宿泊

施設に案内された。

林芙美子の南洋での足取りは望月雅彦『林芙美子とボルネオ島』（ヤシの実ブックス、二〇〇八）と加藤麻子の「南方徴用作家 林芙美子の足取り」に詳しくまとめられている。彼女は一九四二年十一月十六日にシンガポールに到着した後に、まずマレー島を回り、十二月十一日にインドネシアのジャカルタに到着した。その後スラバヤで三泊して、ボルネオのバンダラルマシに二十三日間滞在した後、一月六日にはスラバヤに戻り、一月十二日から十八日までトラワス村の村長の家に宿泊し、三月三日までジャワ島を回り、三日よりスマトラのパレンバンに上陸して四月二十六日にメダンからシンガポールへ移動した。そして、五月五日にシンガポールから飛行機でマニラを経由して日本に戻った。林芙美子の南洋の視察の目的は、占領地で軍政の進展する状況を実見して内地に宣伝することである。彼女は南洋を訪問中にインドネシア人の小学校の教員に日本語を教え、インドネシア女性と座談会で交流して、パレンバンの瑞穂学園で日本語の授業を見学した。軍政の浸透と建設状況の視察を目的とした旅行では、現地でも率先して日本精神を宣伝することを要請された。

林芙美子の中国大陆での従軍体験と南洋での視察行はどちらも公式の派遣でありながら、目に見える風景は同じではなかった。漢口攻略戦に従軍した際の林芙美子は自分を兵隊と同一視したため、駐

屯地ではドラム缶の風呂に入り、平原では露営を経験した。彼女は兵隊と共に行軍していたため、一日に何十キロも長い行程を歩いた。行軍の体験は彼女に、女性の身体の忍耐の臨界点に達する苦痛を覚えさせながらも、兵隊の足を引っ張らないように戦場の残酷さに順応していく挑戦的な「男性性」を引き出させた。彼女は常に自分の「女性性」を周囲の目に晒されていたにもかかわらず、「弱さ」を克服しようとしていた。漢口従軍の際には、毎日、前線の砲声が響いてくる生活をしていたため、従軍記には哀愁が漂い、激しい戦闘で不具になることへの恐怖と不安も書き込まれている。林芙美子の従軍記が多くの人々の心を惹きつけるもう一つの理由は、激しい戦闘の中に彩られた人間の日常の素朴さである。彼女は戦場で不眠不休の従軍体験をしたが、人間の日常の営みもありのままに描いている。

人生をかけたような緊張感に満ちた漢口従軍の経験と比べると、南洋での体験は平和で、気楽であった。往復路で襲撃を受ける危険性が付き纏ったほかには、一髪千鈞の状況には出会わなかったのである。南洋への船で、林芙美子は前線の経験者として「戦争や文学のことは、乗船といつしよに内地におき忘れていたような顔をして、冗談ばかりいつて人を笑わせていた¹⁷」というように、周囲の雰囲気をよくする主役だった。南洋各地への移動は自動車や飛行機などであったため、漢口従軍のような徒歩の苦痛も免れている。この南洋訪問中、彼女は独創性に富む小説の創作ははばせずに、案内書に

近い紀行文を多く書いた。南洋に向かう予定がある人を読者として想定して、必要な持ち物から食べ物、言葉、市場の商品の種類にいたるまでの知識を紹介し、内地人が抱く野蛮な南洋のイメージを訂正しようとした。彼女はジョホール水道の敵前通過点やブキテマの激戦地なども訪れているが、紀行文では漢口従軍の際のように戦争という特定の事象に注目せず、激戦の跡の模様もほぼ略筆で留めている。

南洋では彼女はあらゆるところで歓待されていた。視察の行程の中でも特筆すべきものは、一九四三年一月十二日から十日間ほどスラバヤ州のトラワス村村長であるスプノウの家で宿泊したことである。村民は林芙美子に非常に配慮して、礼儀正しく接していた。医科大学出身の村長スプノウは彼女に「こんな貧しい家に、二週間もゐていたゝいた事は光栄です⁽¹⁸⁾」と述べた。滞在中に、林芙美子は村長の小馬でトラワス村からブリガン町まで米祭りを見に行った。ブリガン町までの道途では一人の下男が馬の手綱を引いてくれて、帰り道には住民がわざわざ籠椅子を用意して彼女を送った。彼女も村の唯一の日本人として、占領者としての特権的位置に立つ自分を意識し、「スプノウ家にある私のことが相当問題になってある様子で、道であふ人達は遠くから中腰になってしづかにえしやくをして私のそばを通つてゆく⁽¹⁹⁾」と記した。戦時中の不可測な情勢の中で、村の人々は突然の客の到来に恐怖と不安を忍びながら、できるだけ彼

女が満足できる訪問が実現するように応接したのであることが窺われる。中国大陸での中国兵士に対する冷淡な感情とは異なり、南洋で厚遇を受けた林芙美子は現地住民に対しても素朴で情熱的という好印象を抱いた。短い旅程であり被植民地者との交流が非常に限られている中では、トラワス村に滞在した際の現地住民との交流が最も印象深かったのであろう。「南の田園 トマンの挿話(二)」という紀行文では、特に自分と親しく親交を交わしたトマンという十七、

八歳の青年の人生の物語を書き記している。トマンの両親は元々白人向けの食料品店を経営していたが、白人が食べ物奪つて逃げた後にトマンは両親とともにトラワス村に戻った。トマンはいつも慎重らしく習ったばかりの日本語で林芙美子に挨拶した。彼女が村に滞在している間に、村で郵便配達をしていたトマンはスラバヤの造船所の人夫になって、日本の船を造ることになった。彼女はトマンが「夢を持つてゐるのだらう。日本船をつくるころへ行つて遠い日本の空気を吸ひたいのであろう⁽²⁰⁾」と感慨を漏らした。林芙美子はインドネシア人の「真姿」を見実するために村長の家に滞在していたが、人夫になったトマンの人生の物語を、日本にいく夢に近づいているという虚偽の言説に回収している。しかし、その後トマンがスラバヤで過ごした人生は、過酷なものであったことは間違いない。結果的に医科大学に行くという夢は破れ、労働力として搾取され続けたのであろう。

林芙美子は戦時中どのように南洋を捉えていたのだろうか。彼女の目に映った人間と自然が調和する「楽園」の南洋イメージは、二つのレベルから描かれている。一つ目のレベルはマレーのゴムと錫という資源が日本の「あらゆる富の出発」であり「大切な生命線」であるというものである。マレーの自然風物は彼女の目には「男性的で、あのえんえんと続いたゴム園と同じやうに、私達に何となく理想を吹きこんでくれる」と映っている。要するに資源の豊富なマレーは日本にとって経済的利益の供給源であり、それが「男性」のような力量と生産性を意味するのである。パレンバンからパダンへの道では、「石油の産地の旅行なので、まるでガソリンの海を航海してゐるやうな安心した感じだった」という軽快で暢気な心情であった。彼女はここで航海の比喻を用い、占領地での資源の占用を当然のことに語るのであった。もう一つのレベルは、南洋を西欧文明の対極にある自然、本能を象徴する希望の楽土と見做すものである。林芙美子はトラワス村で「白人の官邸の遺物一つもない浮世ばなれのした村の生活は、文明に汚れることもなく、自然風物を素直に受け入れてゐる」という「幻想的な」田園の景色に見惚れて、「白人の文明に汚されないインドネシアの女の服装は、世界的にも一番着心地がいゝ」と賞賛している。

特にトラワス村での林芙美子は、都市から離れた山の中に放り込まれて、夜風を受けながら自然の変化を感受するという悠悠とした

生活を過ごしていた。彼女は住民の田植えや薪割り、石油の配給を受け持つなどの日常のなりわいに目を凝らしながら、四季咲きの花と馬車の鈴の音に取り囲まれて、生き生きとした自然から安らぎを感じ取っていた。漢口の戦場の凄惨さは林芙美子に「生創の痛さを与へ」たが、南洋の旅は彼女の荒廃した心を癒やすものとなった。彼女は上下関係を無視して、現地の女性がするように裸足で歩いたり、下男と弁当を分け合ったりしていた。彼女の目には、現地の住民が戦争に影響されず、段々と開墾されていく田圃で働き、その土地で日々の営みを継続していく様子が映っている。このような景色は、彼女に自然によって生かされる人間の生の幸福感を感じさせていた。

しかし、この「豊饒」な楽園像は占領者としての日本人が失ったものを求める心象風景であり、特権的な位置に立っていたからこそ土地の風景をオリエンタリズムの眼差しで理想化しようとしたのであった。林芙美子はトラワス村で石油の配給と木綿の不足という現実を見ていたが、「豊饒」な自然に恵まれている南洋各地の住民は自給自足の生活が実現できることを確信していたのである。彼女は現地住民が直面する生活上の苦難には目を瞑りながら、破壊者としての自分の立場に安住していた。「南方への旅は千載の一遇とも言ふべきで、私は自分の生涯を此光栄ある旅に果てるとも悔ひなしの氣持が独りで歩いた」と述べた林芙美子は、アジアを解放するという

「大東亜共栄圏」の思想をそのまま受け入れていた。彼女は東洋諸国を率いて新たな歴史を開拓するアジアの指導者としての日本の地位を固めるために、南洋で率先して日本のイデオロギーを鼓吹し、「恢復期の清新な風をおくるのも日本のこれからの大事業だ」と日本の侵略を正当化した。

2 南洋の記憶を語り直す

戦後、日本の植民地の喪失とともに、林芙美子の日本の南洋統治についての認識は大きく変わった。日本は解放者から破壊者のような存在となり、彼女の戦後の南洋小説においては、貧弱で無知な日本による占領という認識が貫かれている。

「ボルネオダイヤ」では、日本軍が「慰安婦」を収容するために作った室内装飾を以下のように描写している。

どの部屋にも粗末な疊が敷かれてゐて、塗りの荒い卓子が置いてあつた。外地から来る上官の為には床の間のある部屋もつくつてあつた。床の間には富士山の軸がさがつてゐたし、唐獅子のやうな妙な置物も置いてあつた。畸形的な日本の部屋のかつかうが、かへつて熱帯地では貧弱に見えた^⑳。

上官の性欲を満たすために特別に設置された部屋に置いてあつた日本風の飾り物が熱帯地と不釣り合いで、奇妙な雰囲気を漂わせている。当局は南洋で国威を振りかざすために意図的に各方面から日本の精神と文化を象徴するものを取り入れていたが、このような不自然な権威めかした誇示はかえつて消耗する軍事力と経済力の脆弱さを露呈した。

もう一つの作品「浮雲」では、日本の統治をフランスと比較することを通して、アジアの「西洋」を自称する日本が実際には「西洋」の仮面を被った「東洋」であるという、「停滞」した国のイメージを映し出した。主人公の富岡とゆき子は、オントレーの茶園を訪ねた際に何十年もかけて茶の植え付けをした「仏蘭西人の大陸魂というものに怖れを感じ始めた」と感慨を抱いている。ゆき子は、根気よく茶の植え付けをするフランスの植民者と比べると「狭い意地の悪さで歩いている、野良猫のような自分のあさましさが反省された^㉑」と短期間で産業化しようとする日本人の短絡的な考え方に引け目を感じた。ここでは資源を収奪するだけの日本人像と資源を利用するだけでなく再生することにも豊富な知識を持つフランス人像を浮かび上がらせ、「上手な植民」をするフランスを賞賛するのである。戦時中の林芙美子は、インドネシアの至るところに建てられた別荘を見て、朝鮮や台湾で無闇に別荘を建てなかつた「日本人の質素やつゝましさに胸を打たれる^㉒」と述べ、白人植民者の植民地での利己

的で享樂的な生活を批判しているが、戦後には、植民地に別荘を建てたことは植民者が戦争に興味を持たなかったことの象徴となった。「浮雲」では、フランス人の仏印での「生活のエンジョイの仕方が、終戦になった現在では、もつと美しく、もつと華々しく展開されているに違いない」と心地よい生活を送ることが賛美されている。それに対し日本は、「教養のない貧しい民族ほど戦争好きなものはない」と風刺されているのである。

林芙美子は戦後、日本人像を解放者から破壊者に転じさせただけでなく、「日本人のうつぽとした気持を代表して若い兵隊さんは元氣よく行軍してゆく」と描いていた兵隊の姿も、「未開」で「貧弱」な顔をしている異質な他者として捉えるようになる。

日本の兵隊は、貧弱であつた。体に少しもびつたりしない服を着て、大きい頭に、ちよんと戦闘帽をつけている姿は、未開の地から来た兵隊のようである。街をゆく安南人や、ときたま通る仏蘭西人の姿の方が、街を背景にしてはびつたりしていた。華僑の街も文化的である。

占領地に派遣された兵隊は栄養不足で土地の風景と調和が取れず、仏印に捨て去られたようだった。犠牲にされた日本兵らは戦場での雄々しさが消え、消極的で戦闘能力が全くなくなっていった。兵隊だ

けでなく「浮雲」の主人公でタイピストとして勤務するゆき子も、自分と同様にタイプの仕事をしている、英語、フランス語、安南語ができる現地人マリーに対して「人種的な貧弱さ」を感じている。

アジアの中で最初に文明化を達成した「日本民族」の戦時中の優等性は、戦後、被植民地の人々より劣等で「無能」であるという認識に変わったのである。ゆき子は軍属として仏印での極楽のような生活を享受しているが、「富豪の邸宅の留守中に上り込んでいるような不安で空虚なもの」を覚えていた。「荒野の虹」においても、龍男とセキ子が中野駅で再会して戦時中の南洋体験を追憶する時に、セキ子は「あんまり調子がよすぎた」、「まるでお金持ちのうちへ留守番に来てるやうだ」、「大変な犠牲を払って留守番に行つてたみたい」と感慨を漏らしている。「浮雲」のゆき子と「荒野の虹」のセキ子の二人は、自分達が「よそ者」、「強盗」のような存在で、身を置くべきでないところでいい気分になつていることに対する違和感が共通している。彼女たちは統治に加担している一員として余沢にあづかつて愉快的生活をしながらも、この夢のような生活が長続きしないことを予感している。一九四〇年以降、日本の生産力が戦争による消耗に追い付かなくなり、軍需資源を補充するために、欧州大戦の勃発で植民地南洋を顧みることができない西洋の隙を突いて、日本は南洋にまで戦線を拡大していた。しかし、林芙美子は戦争で戦争を継続させる対策は「留守番」にいくようなものだとして、軍

事力の虚勢をはる統治の脆弱性を、戦後になって作品で晒すようになった。

仏印にまで進駐した日本はアジアの「西洋」になろうとしたが、強盗のように現地を破壊し、「西洋」になりきれない「非西洋」の国に降格してしまった。その挫折感を、戦後になって林芙美子は小説で描くようになった。戦時には、被植民地の人々を人間以下のように扱う残酷な植民者として描かれていた西洋は、戦後には、森林の資源を開発する際に木の性質、地勢、運輸などの注意事項まで丁寧に指導してくれる、学ぶべき他者として描かれるようになっていた。それに対し、資源豊富な楽園である南洋は、「朝鮮や台湾や、琉球列島、樺太、満州、この敗戦で、すべてを失って、胴体だけに」つて、「いまでは、台所の隅々まで掘り起こして、大家族を養わなければならない」⁽³⁹⁾貧弱な日本の、「自己反照」をする場所として描かれる。

しかし、林芙美子が戦時中から戦後まで持ち越したこの楽園のイメージは、依然として植民者が優位に立つ空想的な世界のままであり、フランスと日本による支配で苦しい生活を余儀なくされた被植民者像は不在のままなのである。現実には、フランスの植民地での勢力の回復に反発し、戦後間もなくの一九四六年十二月からベトナム軍はフランス軍と本格的な戦闘を開始している。林芙美子が「浮雲」で描く、フランス人の仏印での「もつと美しく、もつと華々し

く展開されている」という植民者の生活は一方的な情緒でしかなく、このようにフランスの植民を称賛することで、彼女は被植民地の人々の苦闘の歴史を看過してしまったのである。

3 戦場の性

戦後、林芙美子の南洋の記憶は敗戦に伴う日本社会の混乱と荒廃とともに新たに再構築された。彼女が発表した「ボルネオダイヤ」、「荒野の虹」、「浮雲」などの南洋小説では、占領地南洋に渡った主人公たちが体験した異常な狂気と無力感を、戦後の日本社会に帰った後にも空虚感や絶望感として依然として抱えざるを得ない状況が描かれている。彼らは、戦場での自己喪失に陥るような鬱積した感情を、異性への性的欲望を満たすことで救おうとしていた。占領地で国家のために奉仕することを求められた男性の戦士は、〈帝国〉日本の侵略の手先として奮闘を求められたが、日本の聖戦の虚偽と統治の愚挙を眼にすることとなり、その現実には空虚を感じて戦場で戦うことに消極的態度をとるようになった。そうした彼らは、占領地で出会った女性らに性的欲望を投射することによって、剥ぎ取られた人間の本能、生の存在を確認した。他方、性的対象と見做された女性らは、男性たちが生き延びるための性の欲求の捌け口となった。

本節は、林芙美子の戦後小説に描かれた、南洋の主人公たちの性

的体验を中心に、その関係性が戦場におけるどのような男女の不均衡な権力構造の中で成立していたのか、またその経験がどのように戦後日本社会において生き抜くことと繋がっていくのかを考察する。

林芙美子が戦後になって発表した短編小説「ボルネオダイヤ」の主人公・球江は、学業を怠り、食堂の給仕女の職についた。その松谷というコックとの間に子供ができて、その子供を他人にやつた後、彼女は病院船で南洋へ赴いた。球江はボルネオのバンヂアルマシンで東京での約束と異なる「体を犠牲」⁽⁹⁾にする仕事をする事になった。彼女はダイヤモンド鉱区の真鍋と知り合いになり、彼から掘ったダイヤモンドをもらった。ある日、真鍋が球江の部屋を去った後に、彼女は同室の澄子が自ら命を絶つたことを知らされた。澄子の死によつて、球江たちは一日の休暇をもらえた。この小説は、日本人「慰安婦」たちが休暇の日に弁当を持ってマレー人の運転手に自動車でタキシソンの旅館に連れられていったところで締めくくられる。

戦時中に林芙美子はボルネオのバンヂアルマシンの民政部で働く九名のタイピストと座談会を行い交流したが、戦後、彼女が「ボルネオダイヤ」で描いたのは彼女たちのような民政部で働く名誉ある女性ではなく、日本軍が関与した性奴隷制度のもとでの戦場の性規範に抵抗した球江と、心身ともに押し潰された澄子という、対照的な二人の日本人「慰安婦」の生き様であった。

球江が「慰安婦」の仕事を始めた頃には、「いつも将校や兵隊や軍属が詰めかけて」くる生活が耐え難く、「不潔」と「墜落」に陥つた自分を責めていた。四ヶ月の後、彼女は女性を極限まで搾取するこの仕事に不満を抱いていたが、捨て鉢になることでかえって生命力を横溢させるようになっていた。

金色燦然としたものが軀からエーテルのやうににじみ出ている。そして、どんな場所にも怖れることなく、力いっぱい情熱をこめて坐りこんでをられる。四ヶ月の彼女の歴史などは須臾のやうに消えていつてしまふのだ。自然に、何も彼も自分といふものが毀れてしまつたと安心してしまへば、どんなところにも平然と坐りこんでゐられた。辱かしいといふこともなくなつた。どの男も自分の前にはひざまづいてくる自信があつた。いまの生活が球江にとつて面白くないはずはない。⁽¹⁰⁾

球江は非人間的な生活に追い込まれた自分の身体から、女性に求められる貞操観念と道徳観を放逐し、性的に搾取された状況からかえって生命力を引き出した。男性たちに蹂躪された球江の身体を和らげたのはジャワ人の女按摩であった。女按摩は彼女の傷つけられた身体を「蛙を引き伸ばした」⁽¹¹⁾ように揉みながら労つた。国家に利用され、戦場にいる男性の性欲解消のために動物のように扱われた

彼女は、やむをえず己を動物のような状態することで生き抜き、再生を果たした。それによつて、彼女は自分の身体に内在する権力の制御に反逆することができたのである。球江は慰安所で日本国家を代表する兵隊の醜態と暴力的な面ばかりを見てきたため、性的凌辱を受けた自分は被害者側であると認識し、加害者側に正面から対処することができた。それだけでなく、兵隊との力関係を逆転させ、彼らを自分に服従させる「自信」さえ得た。

他方、同室の澄子の身体は性的搾取によつて日に日に衰弱していった。彼女は「唇がいやに腫れぼつたく色が悪くて、暗い灯のせゐか浮かぬ顔色をしてゐた。眉と眼が濡れたやうにはつきりとしてゐる」⁽⁴³⁾といった状態であつた。自死する前日に、一緒に小舟に乗つて河風に吹かれようと澄子は球江を誘つた。二人は軍の規則に違反して、ペランダから降りていき、あてどなく小舟を水流に任せた。

澄子は球江に「泳いででも帰りたいのよ。どうしてこんなところへ来たかと残念なの」と、自由が剥奪され、精神的な崩壊に瀕した絶望的な心情を、泣きながら訴えた。ただ、球江は澄子の切羽詰まつた重圧と苦悩に気づかず、好きな兵士が「重営倉」を受けてモロンブダックの油田作業場で死んでしまったために落ち込んでいるのだと思ひなかつた。澄子は暗闇に取り巻かれながら悔しい思いで脱出を求めていたが、どん底で喚く力さえも尽きていた。

林芙美子は、ボルネオの民政部の事務員やタイピストなどとの座

談会を開催した際に、朝九時から六時までの女性たちの勤務時間のうち、三時から五時までは昼寝時間が確保されていたことを知つた⁽⁴⁴⁾。また、仕事を終えてから十時の就寝時間までは趣味に興じる時間があり、週末には市場での買い物や自転車での遠出もできるのであるが、「慰安婦」として扱われた球江たちは、毎日部屋に閉じ込められ、兵隊たちの性欲を満たすことを強いられていた。

しかし球江たちは澄子の死によつて一日の休暇を与えられた。この日、女たちは弁当を持つてタキソンヘドライブに行つたのだが、球江は澄子の絶望的な心境を理解していなかつたことに苦悶した。ただ、「澄子が死んでも、別に誰もとりみだして泣いてゐるものもない。不思議なことには、儲けやだといふお神さんだけが少しばかりハンカチを眼にあてて泣いてゐた」⁽⁴⁵⁾のであつた。女たちの生き血を吸うお神さんは、働き手を失つたことを悔やんで涙していたが、生ける屍のようにさせられた女たちは、自分と同じ運命に陥つた他者の不憫な境遇を悲しめる精神力すらなくなつていた。

『ボルネオダイヤ』では、バンヂャルマシンの川筋に流れる布袋草の描写が二度されている⁽⁴⁶⁾。小説の語り手は、南洋にきた自分が大勢の群衆の中の一員として、見えざる権力側の力によつて動員され、自分でも制御できない方向へ向かつていることに気づいている。

「自分」を含む、次々と戦場にやつて来る女たちは、水上に漂う布袋草のように、戦争とともに追放されて、あてなく流されていく運命

にある。それをぼんやり眺めてやり過ごしているのだ。この布袋草の描写は、林美美子が自分の運命も南洋に渡った人々と同一線上にあるということを示しているものである。

この小説で、ダイヤモンド鉱区で軍属として働く真鍋は、軍隊の風紀と自分の性衝動とにどのように向き合っていたのであろうか。彼の心中の一端は「球江の体を抱きしめてゐるだけで、朝になると、何ともいへないすがすがしい気持ちでお互ひの顔を見合すことが出来てゐた」⁽⁴⁷⁾のように作中では述べられている。真鍋が球江との肉體關係を忌避する原因は、「何となく、こゝは戦場といふところに気兼ねもあつた。無数の日本人の眼も怖ろしい。それにまた官学生⁽⁴⁸⁾の真鍋には将来の「名誉」といふものも眼のさきにぶらさがつてゐる」というものであつた。規則違反とされれば追放される可能性があるため、彼は周りの人からの監視を意識している。「潔癖」な真鍋にとつて、球江は性的快樂を得るための存在ではあつても結婚の対象ではなかつた。「慰安婦」と性的關係を持つことで自分の「名誉」に汚点を残す可能性もあつたため、真鍋は軍人にふさわしい「高潔」ないメージを保ちたかつたのである。しかし、彼が目にしたのは、戦争の勝利感に酔いしれて買春行為に溺れる兵隊たちの放縱な生活であつた。

軍隊といふものは、一つの土地を占領するまでは勇ましく突

き進んで何も考へるひまもないのだけれど、一つの土地を占領して、そこへ落ちついてしまふと、名誉のある軍隊の規律は、平和的なものに臆病になり、落ちつきがなくなつてくる。四囲が平穩になればなるほど、軍隊の規律は乱れはじめてくる。濁つてくるのだ。⁽⁵⁰⁾

キューネとブックマンは兵隊が戦争で直面する試練に「教練、暴力の行使、死の危険」だけではなく、「アルコールの過剰摂取や売春宿の訪問といった男性性の儀式」⁽⁵¹⁾の通過への同調圧力も存在していると指摘している。軍隊という組織における「男性性」の獲得と競争の手段には、敵を殺戮するというもののほかに、女性の身体を占有し征服することで「男らしさ」を誇示するというものもある。

一九四〇年十月に大本営陸軍部研究班が発表した「支那事変ニ於ケル軍紀風紀ノ見地ヨリ觀察セル性病ニ就テ」には、「戦地ニ在リテ生活ヲ営ミ彈丸雨飛ノ下生死ノ境ヲ突破」することによつて「性欲ニ対スル強烈ナル享樂心」⁽⁵²⁾が起こりやすくなると書かれている。日本軍の大量の慰安所の設置には、戦場で死線を潜り抜ける兵隊を「慰安」しその働きを「奨励」する思惑があつた。球江たちは男性のホモソーシャルな連帯のための道具のような存在であつた。真鍋は自分の性欲を抑制したが、戦場に出た自分の不安と寂しさを紛らわすために異性の優しさを求めていた。常に防暑服をきて、自動車で自

由に移動する真鍋と異なり、部屋に閉じ込められて身動きできない球江は、自分の身体を次々と訪ねてくる男性に性交を強いられ侵犯されうる存在であった。真鍋の「潔癖」は、戦場で凌辱された女は「不潔」であるという思想に由来するものであり、性交渉を忌避する一方で、結婚の約束ができない償いとして自分が掘り出したダイヤモンドを球江に渡す。ダイヤモンドを受け取った球江は「しみじみと眺め」、「ふつと、何の関連もないのに、別れた子供の顔が眼に浮んで来た」のである。彼女はそれをお神さんに売りつけて金銭化しようとした。「軍需貨物」とされた自分が置かれた状況を深く知った上で、補償物としてのダイヤモンドを売り、奴隷のように扱われた過酷な経験によって得たものを身に留めて置かないようにした。ただ、高価であるはずのダイヤモンドは、その魅力を実感できないまま眺めていると理由もわからず他人にやっただ子供の姿を球江に思い出させ、彼女に淋しい思いをさせた。

4 戦場の私的恋愛関係

「ボルネオダイヤ」において林芙美子は、軍部が設置した公的な慰安所で生き抜いた女性の体験を描いているが、もう一つの戦後の短編小説「荒野の虹」では、戦場での私的恋愛関係によって個人の虚無感を克服した人物が描かれている。小説のあらすじは以下の通

りである。龍男は南洋の戦場で緋佐子と出会い、二週間の間、共に遊んだ。戦後、日本に帰ってきた龍男は妻・春江に対する愛情が希薄になり、別れに至った。彼は東京で、南洋にいた当時緋佐子と一緒にだったダンサーのセキ子と再会して、春江よりも野性的な彼女により強い印象を受けた。そのため彼は妻との復縁を諦めてしまったのである。

六年間満州や広東、安南、スマトラなどを転々として戦ってきた龍男は、戦闘によって非人間的な心身状態を招いてしまった。故郷のことはいつか漠然としたものになり、その話題に対する虚しい期待や懐かしさもなくなっていた。戦争の目的がわからなくなつたまま、兵隊の「数の数である」自分が「空に向つて砲を撃ち戦つてゐる」こともあつた。戦闘する気力と意志を喪失した彼は、聖戦という名目の暴力に内在する虚偽に憂鬱を感じた。自分の人生は戦争に翻弄されて、兵隊という身分から脱離できずに無意味で残酷な現実に投げ出されていると感じ、抜け殻のような生き方をしていた龍男を復活させたのは、戦地慰問に来ていたレビュー団の緋佐子との出会いだつた。龍男は焼き鳥店で緋佐子と出会つた。二人はそれから二週間で三度会つただけに過ぎないが、この付き合いは龍男を軍隊の規律から逸脱させ、墮落の愉悦を味あわせた。河口のほとり「やくざな兵隊」のように、龍男は寄り添ってきた緋佐子を抱きしめて接吻した。龍男は「あゝ、おいしかったわ……」と言つた緋佐子

の反応に対して、最初「男を男とも思はぬ女のすさみかた」を「腹立たし」く思う。龍男は「男らしさ」が突き崩されたことと、狼狽を見透かされたことに一瞬怒りを覚えたが、緋佐子ともう一度接吻した後に、「しみじみと人間の心呼びもと」すように「接吻の美味しさが体に満ちあふれるやうだった」と感じている。肉体の感覚だけで生きることによつて、人間の本能的な欲望が呼び起こされた。彼は緋佐子との出会いによつて六年間の惨めな兵隊生活が償われたように感じ、「南のある日が恋しいと思つた」⁽⁵⁷⁾のである。

敗戦後、日本に引き揚げた龍男が目にあたりにしたのは、生まれ育つた土地が廢墟と化した光景であつた。あらゆる精神的な基盤が崩壊した後に、妻との婚姻生活における繋がりも消えていた。ある日、龍男は電車で緋佐子と一緒にセキ子と会つた。目の前に「煙を吐きつけた」セキ子の「浅黒い肌が野性的で、誘惑的」⁽⁵⁸⁾だつた。彼女は日本に帰つた後、空襲を避けるために深川、甲府と居所を転々とした。セキ子は荒れた生活を送っている自分を「裸ん坊」だと告白した。龍男は人間を束縛する道徳、規範を捨てたセキ子の姿に惹きつけられた。彼は緋佐子に対する未練をセキ子に当て嵌めて欲望し始めた。「セキ子の野性的な茶色の眼」には肉体の生命力の躍動が宿っている。龍男は人間の本能的な欲望を剥き出しにしてくられるセキ子の「野性的」な肉体を欲して人間の再生を求めているのである。彼は戦争がもたらした崩壊によつて「激しいロマネスクな

宿題を心にたゝみこんでしまつてゐるに違ひない」と思つた。⁽⁵⁹⁾

国家の最小単位として構築された家庭は、規範と道徳で人間を取り囲みながら協力し合う夫婦愛を賛美することによつて、社会の安定と発展に貢献する存在として設けられたものだつた。戦時中、人間は国家と軍隊という強圧的な集団の中で個の意志を抑圧して公の暴力に従属する生き方をしていた。家庭を築くことは国家の運命と結ばれるものであり、個人にとつて必然的な選択肢のようにその道に進むことを求められた。ただ、周囲の環境に流されて結婚生活を送る多くの家庭では、男性の前線への出征によつて夫婦の別離とならざるを得なかつた。日本に復員した龍男は社会の価値観で縛られる夫婦関係よりも、肉感的なロマネスクなものを追い求めて立ち上がつていこうとした。残酷な戦場で見失われた人間性を再建するためには、生きる原動力を弱化させる制度、觀念と訣別しなければならぬ。その訣別から、野性的で本能的な人間の生き抜く力が生まれてくるのである。龍男は過去の自分を克服するために、自分を投げ出すように生命力が横溢するセキ子に頼つて、心の底にある本能的欲望に従うことを決めた。

「浮雲」においても、占領地で「狂人」状態になつた主人公が、情事で孤独と不安を克服する様子を描いている。一九四三年十月にゆき子は、寄宿先の伊庭杉夫との不倫関係から脱出するために、仏印の栽培園試験所でタイピストとして働き始めた。ダラットで彼女は

林業を調査する技師である富岡兼吾と灼熱の恋に落ちたが、ゆき子は自分に愛情を打ち明けた加野に傷つけられた。敗戦後、ゆき子と富岡の関係ははずると続いて、二人は自暴自棄の生活を送っていた。絶望のどん底に陥った富岡はゆき子を連れて伊香保で中心しようとしたが、伊香保のバーの十八歳のおせいと出会い、東京でおせいと同棲を始めた。おせいの亭主はおせいの復縁を要求したが、拒絶された後におせいを絞殺して自首した。伊香保から帰った後に富岡とゆき子はしばらく連絡が途絶えていたが、ゆき子は身こもった子供をおろし、伊庭が起こした大日向教の教団に会計事務として勤めた。富岡は浦和に残した妻の邦子が病気で亡くなると、葬式の代金をゆき子に借り、そのことで二人はまた復縁した。その後、ゆき子は大日向教の金庫の六十万円ほどの金を盗み、島流しのような形で富岡と屋久島に行ったが、屋久島でゆき子は発病して亡くなった。

占領地に派遣されたタイピストらの任務地は、能力よりも外見と服装で決定された。また、彼女たちの才能を生かすことは重視されていなかった。男性を墮落させる存在と見られることもあった。ゆき子は四人のタイピストと一緒に病院船でハイフオンに着いた。ほかの四人はそれぞれハノイとサイゴンに勤め先が決まったが、外見が目立たないゆき子は貧乏くじを引き、高原のドラットに決まった。ゆき子は同行の春子のおしゃれな格好に引け目を感じ、「平凡な顔」

によって平凡な運命となったことを受け入れるほかなかった。しかし、地味なゆき子は、鉾山班の瀬谷という老人に「かえって、仕事にはいい」と言われた。逆に春子は「美人だから問題を起しはしないか」と心配される。女性を取り巻く状況は彼女たちの外見と大きく関わっており、「平凡な顔」と判定されれば不利な選択を余儀なくされた。しかし、ゆき子が来たために栽培試験所ではある事件が起こった。栽培所で働く加野久次郎は初めてゆき子を見た時に非常に驚き、すぐ彼女に惹かれた。長い間山の中にいた加野はゆき子に対する感情が噴き出すのを抑えきれなかった。しかし、ゆき子と富岡があいびきし始めると、加野は刃物でゆき子を傷付けたのだ。加野だけでなく、富岡も長期の禁欲生活によって精神的に変調をきたしてしまった。彼は女中のニウを妊娠させ田舎へ帰った。ゆき子を純粹に愛することができず、檻に囚われた獅子のように「あてがわれた牝をせつかちに追いまわすような、空虚な心が、ゆき子との接吻の中に、どうしても邪魔つけで取りのぞきようがない」という心境であった。富岡と加野は高原に閉じ込められているうちに、孤独に呑み込まれそうになった。この孤独の蓄積による人間の精神的な萎縮は、彼らを動物化して自己統御をできなくさせた。加野はゆき子と再会した時、仏印にいた頃にゆき子に惹かれて怪我をさせた自分を不可解に思い、「出先の日本人の生活には、一種の魔がさしていたのかも知れないのだ。みんな、虹のようなものに酔っ払って暮らし

ていたような気がして来る」⁽⁶²⁾とかつての狂氣的な状態を思い出した。「浮雲」では虚無感に苛まれるのは男性だけでなく、仏印にきたゆき子も、タイピストの能力を発揮できず虚無感に打ちひしがれそうになつていた。ゆき子はサイゴンの旅館の食堂で富岡と会つてから、彼のことが頭から離れなくなつていた。ドラットで富岡と再会した時、ゆき子は「いままで死んだようにぐったりしていた気持ちのなかに急に火を吹きつけられたような切ないものを感じた」⁽⁶³⁾のである。戦時中の閉塞的な日本を脱出した彼女は、仏印でロマンチックな恋物語に耽る。恋をするために恋に落ちたと言える。贅沢な生活と、悠悠とした景色を背景とした自分と富岡の恋愛は、彼女を夢見心地にさせた。自分の物語を戦争という歴史の大変動の舞台で醸成させることで、ゆき子の心にはこの恋愛の鮮烈な印象が焼き付いた。特権を持つ者として被植民者を支配下に置き、享樂的な生活を送つていた彼女には、その幻影がいつか消えてしまうという不安があつた。そのため、他者との性的関係を求めることによつて自分の空虚を埋めるはかなかつたのであろう。しかし、彼女は男性に征服されるべき獲物と見なされて、女性としての肉体は「男性性」の優劣を競う争いの戦利品となつた。加野は富岡との争奪戦に敗れたことで、戦場での秩序の下位に置かれているゆき子に肉体的な暴力を振るつた。加野に傷つけられてできた身体から消えない傷痕のように、彼女の戦後の生活からは仏印での記憶の余熱が消えることはなかつた。間

中宏美は、「労働力」として仏印に動員されたゆき子だが、彼女には現地男性の性欲を満足させる「娼婦」としての役割も存在していることを指摘している⁽⁶⁴⁾。戦時中に男性の獲物と見做された体験は、ゆき子が戦後、パンパンになることに抵抗を感じないことの原因となつた。

「浮雲」は、戦後日本社会の風景を仏印のイメージと対照的に描き、それぞれの舞台を交錯させることによつて、占領者と引揚者という身分の転換による生活の落差を反映させている。富岡とゆき子が戦後になつても関係を完全に断つことができなかった原因は、二人とも戦後日本社会で迷走し自己崩壊感を覚えていたために、過去の、自然と戯れる極樂のような南方の記憶が二人を繋ぐ絆となつたことにある。敗戦後の異常な自己は、戦時中の狂氣的な自己を受け継いでいるため、過去の記憶を共有することは、常に失われた個人の歴史を補完し合うことを意味する。しかし、ゆき子と富岡の記憶は一樣ではなかつた。戦後、ゆき子は富岡との関係を継続することで過去の記憶にしがみつきながら生きていく力を得ようとしたが、富岡の仏印に対するノスタルジーは、ゆき子との恋物語よりも「土地の持つ香氣」⁽⁶⁵⁾にあつた。「土地の香氣」とは南洋の独特な果物、香木、山水などであり、それらは彼に新鮮な身体感覚を与えた。彼の仏印の記憶に潜む暗い影は二度と会うことがない自分の子供を身ごもつた安南人女中のニウのことであつた。しかし、ニウと子供の物語は

エキジチズムに溢れた南洋の独特な色合いに霞み、懐かしいという情緒に回収されるだけであった。彼は仏印という場所と過去の自分が全て幻想になったことに気づいたため、ゆき子との感情も一時のものだとして決別しようとした。小説の結末で、富岡が屋久島に着いた後に新しい時計を購入したのも、過去の記憶と決別して再出発する意向を固めたことを意味するのだろう。しかし、ゆき子にとって仏印での生活の記憶は生きる糧であり、たとえ虚像のように非現実的なものであっても、彼女はその記憶を再生し理想化し続けようとした。彼女が仏印の景色に似た屋久島で亡くなったことも幻想の場所に自分を回帰させようとする願いの象徴であろう。

林芙美子の戦後の小説には、占領地でお互いに孤独感を和らげ合い性的な関係を結んだ男女の恋愛物語が描かれているが、それとは対照的に、日本に帰国した後に、戦時中の隔絶した体験の影響で夫婦関係が「不健全」になり、赤の他人のような関係性になってしまふ男女の姿も浮かび上がらせた。「浮雲」において、引き揚げてきた富岡と妻の邦子との生活は「不毛荒蕪地」⁽⁶⁶⁾となつて、五年の空白を埋めることができない。別居した後、邦子は独り浦和で、まるで自ら死を望むような悲惨な闘病生活の果てに亡くなった。「ボルネオダイヤ」では、妻が夫婦の婚姻の証としたダイヤモンドを自主的に国へ供出するのに比べて、ダイヤモンドの価値を素直に喜んでくれた球江の方が圧倒的に爽快だったと真鍋は思った。また、ダイ

ヤモンドの価値を知らない妻は、現地で行き詰まった日本の軍政と共通しているように彼には見えた。真鍋は、至上の権威に人間らしい感情を手渡すことで個人の感情を封殺し、暴力装置に帰依する妻の行動に隔たりを感じている。前線で自分の使命に消極的になった真鍋と対照的に、戦闘に直接関与しない銃後にいる妻は積極的に当局の暴走に仕えた。「荒野の虹」においても、帰国した龍男は六年間会わなかった妻の春江との関係が「寿司の味をなさない」⁽⁶⁷⁾無味なものになったと感じた。戦後、人生の基盤が崩壊すると同時に、内地と外地、前線と銃後にいた人間の断絶した空間と体験は共有されない精神的な分裂を生み出している。軍事工場でダイヤモンドを掘ることに退屈した真鍋と、空に向かって砲を撃った龍男は、二人とも自分の仕事に身が入らず、戦意がなくなってしまった。その原因は、国家の戦争物語に内在する、人間を狂人化する仕組みを現場で体感していたことである。真鍋と龍男は、前線で軍部の強権によって狂人化した人間の行動を目の当たりにしたからこそ、人間性を呼び戻すロマンチックなダイヤモンドの美と愛欲に惹きつけられたのだろう。二人とも、戦時中の生きるか死ぬかという極限状態の時異性が自分の肉体に注入した生の感覚によって救われているため、古い社会的規範で結びついていた夫婦の関係性を徹底的に破壊させて、新たな自己を生成することを望んでいる。以上のように、戦時中に国家・社会的規範で結びついた親密な関係性は、前線と銃後という

ジェンダー役割分担のために、体験の不一致と軍部の立場に対する認識の相違を引き起こした。過去の自己が結んだ「円満」に見える夫婦関係を、一度壊さなければ戦後における新たな自己を確立することができず、過去の自己に逆戻りすることを恐れなければならぬ人間の生の悲哀がそこには表れている。

結びにかえて

本論文は林芙美子が書いた紀行文や小説における南洋という場所の描写に注目し、戦時中には戦争資源を供給する「楽園」として描かれていたものが、敗戦後には日本と対照される精神の拠り所としての想像上の「楽園」に変じたことを論じた。戦後になっても、林芙美子にとつての南洋は依然として「西洋」に支配され得る場所であり、引き揚げ者に夢を見続けさせてくれる空間でもあった。林芙美子は、日本が占領地の人々の生活に多大な影響を与えたことを意識してはいたが、その侵略を「迷惑なもの」と表面的にしか認識していない。彼女にとつては侵略という軍事行動は他者の生活様式を変えさせたというだけで、自分も無数の命が奪われた戦争の協力者であるという自覚が薄く、自分が抱える責任に対する深い反省は見られない。戦時中、南洋の長閑な風物に惹かれて、「何時までも旅情にひたつてはゐられない」⁽⁸⁾という感慨を抱いていた彼女は、戦後に

なつてからも南洋に対して抱いた「楽園」のイメージをそのまま持ち続けた。滞在期間中に感じ取った自由自在な心情が彼女の脳裏に強烈な印象を残し、敗戦後の絶望的な日本社会の状況と照らし合わせた時、そのことが、南洋の記憶がより美化されることに繋がったのだろう。そうした幻想を持ち続けたことで、日本社会の過去の占領地統治を正当とする考え方を無自覚に共有するという結果を招くことにもなった。

林芙美子の南洋小説においては、日本に戻った富岡、龍男などの主人公の精神状態は萎縮していた。近代国民国家は男たちに兵士としての身分を付与することで、他者を征服し領土を拡大する欲望を背負わせた。男性たちの戦闘力と攻撃性を鼓吹すればするほど国力の強大さを示威することにもなった。「浮雲」の貧弱な兵隊の姿は仏印における日本統治の威信の消散を暗示していたのに対して、戦後に日本に引き揚げた富岡、龍男たちの「男性性」の頹廃は、占領地を手放し廃墟になった日本の国力を連想させる。他方、球江、ゆき子、おせい、セキ子などの女性はいずれも個性的で野性的なエネルギーを持つていた。戦場で戦闘する意味を喪失した男性たちは個人の実存を確認するために女性との性的接触によって生の本能を補充していたが、非対称の関係性に置かれた女性たちは自分の指定された位置に応じてそれぞれの対応をとり、絶望や順応、反逆などの状態を呈していた。川村湊は戦争直後の文学の特徴として、『肉

体』が語られ、『墮落』や『生の本能』が語られたのは、家も肉親も国家も失ってしまった人間たちに残ったのが、ただ一つがむしろに生きようとする『獣』のような生存本能、肉体の欲求にほかならなかったからだ』と指摘する。球江、ゆき子、おせい、セキ子などは獣のような旺盛なエネルギーの持ち主であり、社会から投げ出されても苦境を打開しようとしていた。林芙美子は、国家が底辺に落ちた女性に付与した「娼婦性」という属性に抵抗する女性を描くことによって、生き抜くために女性が持つ生の原動力を称えたのである。

戦後間もなく、占領地における男性による女性の性的搾取の構造を作品で暴露する作家が少なかった中で、林芙美子は「慰安婦」、ダンサー、タイピストなどのそれぞれの職業の女性たちが、戦場で男性の性的欲望を向けられ所有物になり得る存在であったことを作品に描き出している。林芙美子の人生の物語と文学の基盤は一所不在の放浪を中心としているため、彼女の南洋小説においても、良妻賢母という社会の規範から逸脱して、どん底に陥る女性達の生い立ちに光を当てていた。人物の造形が自己像と照らし合わせたものにもなっており、常に底辺の人々への共感を伴っている感覚が彼女の南洋文学の特色なのである。

注

- (1) 木村一信・神谷忠孝『南方徴用作家』世界思想社、一九九六年、三頁。
- (2) 櫻本富雄『文化人たちの大東亜戦争——PK部隊が行く』青木書店、一九九三年、二十一頁。
- (3) 林芙美子「南方可憐だより——マライからの第一信」『週刊朝日』、朝日新聞社、一九四三年一月十三日・十六日合併号。
- 林芙美子「新年所感」『ボルネオ新聞』朝日新聞社、一九四三年一月一日。
- 林芙美子「詩雨」『ボルネオ新聞』朝日新聞社、一九四三年一月二十九日。
- 林芙美子「詩タキソンの浜」『ボルネオ新聞』朝日新聞社、一九四三年二月二日。
- 林芙美子「詩南の雨」『ボルネオ新聞』朝日新聞社、一九四三年二月五日。
- 林芙美子「詩スラバヤの蜚」『週刊婦人朝日』、朝日新聞社、一九四三年三月。
- 林芙美子「南方朗漫誌 果物と女の足」『週刊朝日』、朝日新聞社、一九四三年五月十六日。
- 林芙美子「ジャワの夜はガメロンで」『週刊朝日』、朝日新聞社、一九四三年五月二十三日。
- 林芙美子「南方朗漫誌 芭蕉の葉包み」『週刊朝日』、朝日新聞社、一九四三年五月三十日。
- 林芙美子「スマトラ——西風の島」『改造』改造社、一九四三年六月。
- 林芙美子「スマトラ——西風の島(続)」『改造』改造社、一九四三年七月。
- 林芙美子「南の田園 トマンの挿話(一)」『婦人公論』中央公論社、一九四三年九月。
- 林芙美子「南の田園 水田祭(二)」『婦人公論』中央公論社、一九四三年十月。

- (4) 加藤麻子「南方徴用作家 林芙美子の足取り——馬來・蘭印行程と、『浮雲』の仏印行程」『武蔵大学人文学会雑誌』武蔵大学人文学会編、二〇〇五年、二四九―二七〇頁。
- (5) 望月雅彦『林芙美子とボルネオ島——南方従軍と『浮雲』をめぐって』ヤシの実ブックス、二〇〇八年。
- (6) 中川成美「林芙美子——女は戦争を戦うか」『南方徴用作家』世界思想社、一九九六年、二四二―二五八頁。
- (7) 山下聖美が発表した論文は下記のとおりである。
- ① 「林芙美子の南方従軍についての現地調査報告①インドネシア・トラワス村」『日本大学芸術学部紀要』五十五号、日本大学芸術学部、二〇一二年、二五―三十一頁。
- ② 「林芙美子の南方従軍についての現地調査報告②インドネシア・トラワスを舞台とした小品「南の田園」」『藝文攷』十七号、日本大学大学院芸術学研究科、二〇一二年、六十四―七十九頁。
- ③ 「林芙美子の南方従軍についての現地調査報告③「スマトラ——西風の島」「荒野の虹」「望郷」に描かれるスマトラ」『日本大学芸術学部紀要』五十七号、日本大学芸術学部、二〇一三年、二一―三十一頁。
- ④ 「林芙美子が見た日本占領下インドネシアの日本語教育——スマトラ・パレンバン」の瑞穂学園についての調査報告」『日本大学芸術学部紀要』六十二号、日本大学芸術学部、二〇一五年、五―十二頁。
- ⑤ 「日本軍政下インドネシアにおける林芙美子の文化工作」『日本大学芸術学部紀要』六十八号、日本大学芸術学部、二〇一八年、五―十二頁。
- (8) 高山京子「林芙美子『浮雲』論」『文学と教育』、文学と教育の会、二〇〇〇年、三三八―四四五頁。
- 高山京子「林芙美子の戦中と戦後」『創価大学大学院紀要』二十三号、大学院紀要編集委員会、二〇〇一年、一九―三十一頁。
- (9) 鳥木圭太「女性作家の見た〈南方〉——林芙美子と佐多稲子のスマトラ」『論究日本文学』一〇六号、立命館大学日本文学会、二〇一七年、一―十六頁。
- (10) 間中宏美「林芙美子『浮雲』——ゆき子の〈転落〉をめぐって」『国文目白』四十五号、日本女子大学、二〇〇六年、一三五―一四五頁。
- (11) 川本三郎「浮雲」おおう「暗さ」『大航海——歴史・文学・思想』三十五号、新書館、二〇〇〇年、一六三―一七三頁。
- (12) 羽矢みずき「二つの「仏印」／二つの「屋久島」——林芙美子『浮雲』論」『立教大学日本文学』八十一号、立教大学日本文学会、一九九八年、九十三―一〇三頁。
- (13) 山下聖美「林芙美子「ボルネオダイヤ」を読む」『日本大学芸術学部紀要』五十九号、日本大学芸術学部、二〇一四年、二七―三六頁。
- (14) 尹小娟「林芙美子における戦後の南方体験表象の位相について——「ボルネオダイヤ」から「浮雲」へ」『近代文学研究』三十号、日本文学協会近代部会、二〇一七年、四十九―六十二頁。
- (15) 黒田秀俊『軍政』学風書院、一九五二年、六十六―六十七頁。
- (16) 同右、七十一頁。
- (17) 前掲望月「林芙美子とボルネオ島——南方従軍と『浮雲』をめぐって」、四十四頁。
- (18) 前掲林芙美子「南の田園」トマンの挿話(一)」、三十三頁。
- (19) 同右、三十四頁。
- (20) 林芙美子「北岸部隊」『林芙美子全集第十二巻』文泉堂、一九七七年。
- 原文引用：
- 「丘の上や畑の中には算を乱して正規兵の死体が点々と転がっていた。その支那兵の死体は一つの物体しか見え、さつき、担架の上にのせられて行つた我が兵隊に対しては、沁み入るような感傷や崇敬の念を持ちながら、この、支那兵の死体に、私は冷酷なよそよそしさを感じる。その支那兵の死体に対する気持は全く空漠たるものだ。私は、本当の支那人の

生活を知らない冷酷さが、こんなに、一人間の死体を「物体」にまで引きさげ得ているのではないかと考えてみた。しかも民族意識としては、これはもう、前世から混合する事もどうもできない敵対なのだ。」(二八三頁)。「私は今日まで飽き飽きするほど中国兵の死体をみて来たけれど、生きている中国兵は、何時見ても何となく気持が悪い。彼達はわからない言葉で何か哀訴している。何を云っているのか勿論兵隊にもよく解らないに違いない。」(三〇六頁)。

- (21) 前掲林芙美子「南の田園 トミンの挿話(一)」、三十六頁。
- (22) 前掲林芙美子「南方初だより マライからの第一信」、二十一頁。
- (23) 前掲林芙美子「南方朗漫誌 芭蕉の葉包み」、十九頁。
- (24) 前掲林芙美子「スマトラ——西風の島」、九十三頁。
- (25) 前掲林芙美子「南の田園 水田祭(二)」、五十四—五十五頁。
- (26) 同右、五十六頁。
- (27) 前掲林芙美子「北岸部隊」『林芙美子全集第十二巻』、二九六頁。
- (28) 前掲林芙美子「スマトラ——西風の島」、八十七頁。
- (29) 同右、八十八頁。
- (30) 林芙美子「ボルネオダイヤ」『林芙美子全集第六巻』文泉堂、一九七七年、一五三頁。
- (31) 林芙美子「浮雲」『林芙美子全集第八巻』文泉堂、一九七七年、二五〇頁。
- (32) 前掲林芙美子「南方朗漫誌 芭蕉の葉包み」、十九頁。
- (33) 前掲林芙美子「浮雲」『林芙美子全集第八巻』、三〇八頁。
- (34) 前掲林芙美子「南方朗漫誌 芭蕉の葉包み」、十九頁。
- (35) 前掲林芙美子「浮雲」『林芙美子全集第八巻』、一七九頁。
- (36) 同右、一八九頁。
- (37) 同右、一八七頁。
- (38) 林芙美子「荒野の虹」『林芙美子全集第七巻』文泉堂、一九七七年、一八頁。

- (39) 前掲林芙美子「浮雲」『林芙美子全集第八巻』、三六二頁。
- (40) 前掲林芙美子「ボルネオダイヤ」、一五三頁。
- (41) 同右、一五六頁。
- (42) 同右、一五一頁。
- (43) 前掲林芙美子「ボルネオダイヤ」、一五四頁。
- (44) 林芙美子「ボルネオの花束」『週刊婦人朝日』朝日新聞社、一九四三年二月三日、十八頁。
- (45) 前掲林芙美子「ボルネオダイヤ」、一六二頁。
- (46) 前掲林芙美子「ボルネオダイヤ」。

原文引用・

「ほんのさつき、最後の夕映が、遠く刷き消されていつたとおもふと、水の上を一日ちゆう漂うてゐた布袋草も静かに何処かの水辺で、今夜の宿りに停つてしまふに違ひない……」(二五二頁)。

「その賑やかな小舟の間をものすごい大群の布袋草がきしみあつて河筋を潮に押しあげられてゆくのだ。水もみえないほどの水草の流れは、暫く眺めてみると、自分がレールの上を滑つて動いてゐるやうな錯覚にとらはれてくる」(二五九—一六〇頁)。

- (47) 同右、一五六頁。
- (48) 同右、一五八頁。
- (49) 同右、一五七頁。
- (50) 同右、一五八頁。
- (51) Kühne, Thomas (2006) *Kameradschaft: Die Soldaten des nationalsozialistischen Krieges und das 20. Jahrhundert*. Vandenhoeck & Ruprecht GmbH & Co. Buchmann, Bertrand Michael (2009) *Österreich in der Deutschen Wehrmacht: Soldatenalltag im Zweiten Weltkrieg*. Bohlau Verlag Wien.
- 引用元・レギーナ・ミュールホイザー著、姫岡とし子訳『戦場の性——独ソ戦下のドイツ兵と女性たち』岩波書店、二〇一五年、十八頁。

- (52) 吉田裕・松野誠也『十五年戦争期軍紀・風紀関係資料』現代史料出版、二〇〇一年、二六三頁。
- (53) 前掲林芙美子『ボルネオダイヤ』、一六一頁。
- (54) 渡邊澄子「身も心もささげる「大和撫子」——田村泰次郎の戦争文学」『買売春と日本文学』東京堂出版、二〇〇二年、二二〇頁。
- (55) 前掲林芙美子「荒野の虹」『林芙美子全集第七巻』、一〇五頁。
- (56) 同右、一〇九頁。
- (57) 同右、一〇一頁。
- (58) 同右、一一八頁。
- (59) 同右、一一九頁。
- (60) 前掲林芙美子「浮雲」『林芙美子全集第八巻』、一八六頁。
- (61) 同右、二〇二頁。
- (62) 同右、三〇四頁。
- (63) 同右、一八五頁。
- (64) 前掲中宏美「林芙美子『浮雲』——ゆき子の〈転落〉をめぐって」、一三五—一四五頁。
- (65) 同右、一八五頁。
- (66) 前掲林芙美子「浮雲」『林芙美子全集第八巻』、三六三頁。
- (67) 前掲林芙美子「荒野の虹」『林芙美子全集第七巻』、一二〇頁。
- (68) 前掲林芙美子「南方朗漫誌 果物と女の足」、十九頁。
- (69) 川村湊『戦後文学を問う——その体験と理念』岩波新書、一九九四年、九頁。